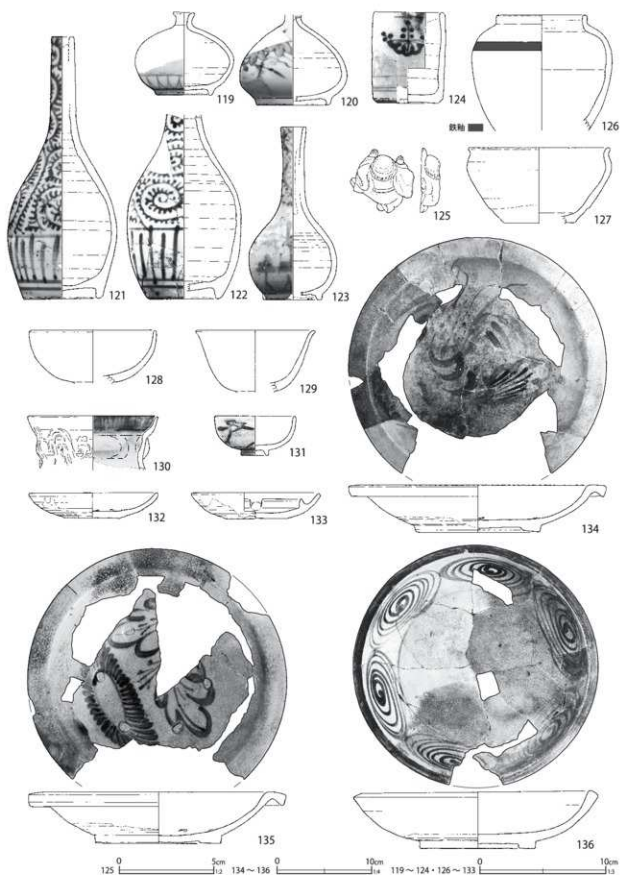
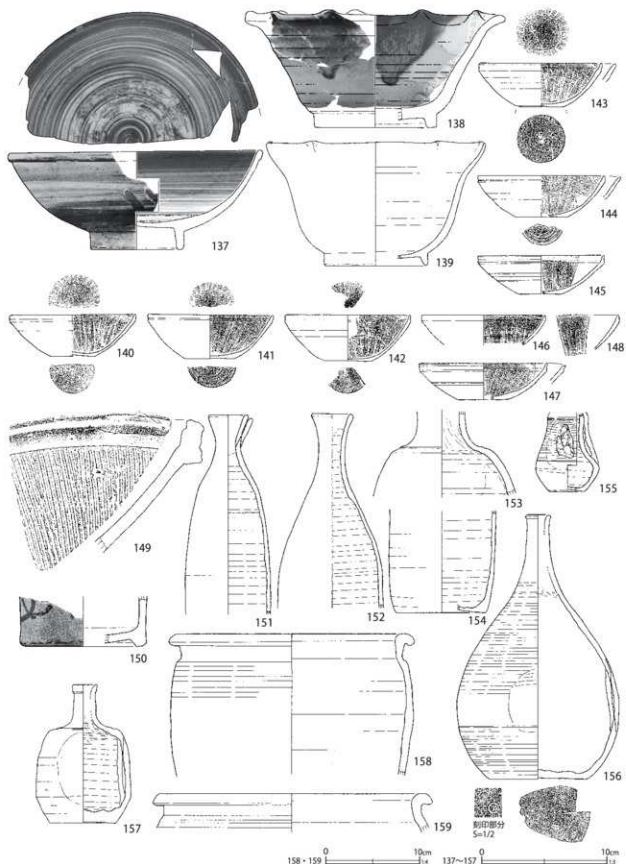
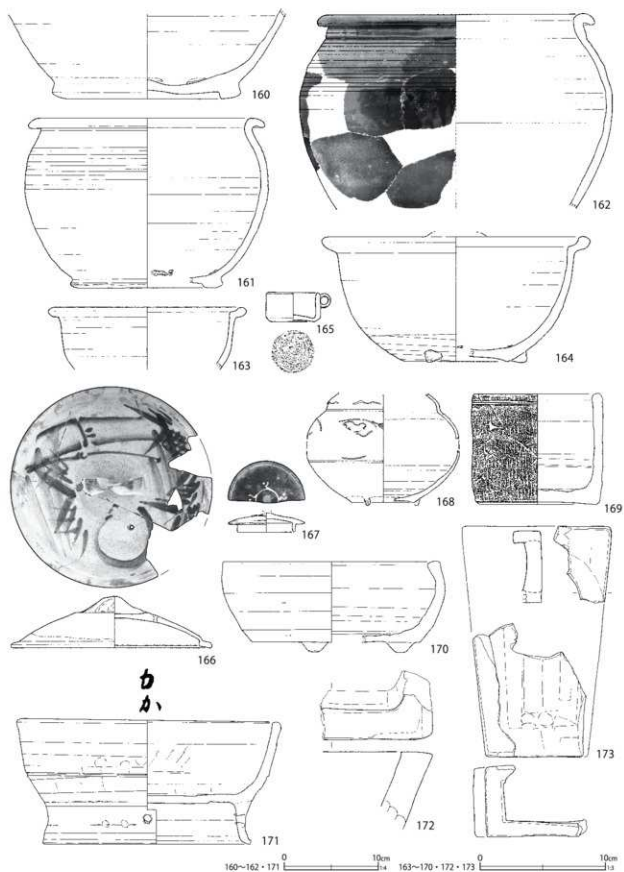




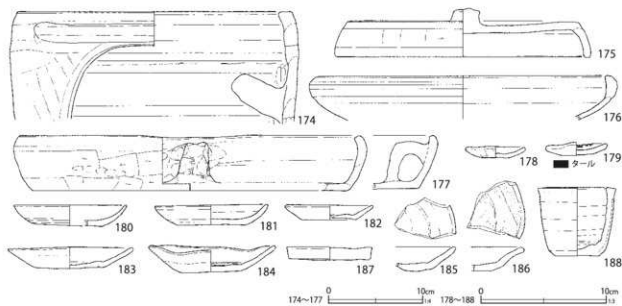
第144図 土壇出土遺物 (10)



第145图 土坑出土遗物(11)



第146図 土壇出土遺物 (12)



第147図 土壌出土遺物(13)

れるものである。栗橋宿本陣跡でも3点ほど出土している。立花善史は仏像の光背の可能性があると指摘し、越村篤は絵画から男児の初正月を祝う破魔弓飾りの部材と指摘している(立花2000、越村2013)。都内の遺跡では汐留遺跡の脇坂屋敷跡ほか、千代田区、新宿区、港区、墨田区などで50点あまりが出土している(立花2000)。第212図86は鉄製品の火箸、第214図11は北宋銭の紹聖元宝である。第216図19は石製品硯、20は大型の砥石で、端面にノコギリ状の痕跡が認められる。第219図6は硝子製筭である。他に貝杓子(写真図版115)が1点出土した。なお、覆土中から多量のモモ殻が検出され、僅かにウメ種子も混じる(自然科学分析参照)。このような多量のモモ殻の出土は第623号土壌でも確認されたが、その用途は不明である。

第442・450号土壌(第127図)

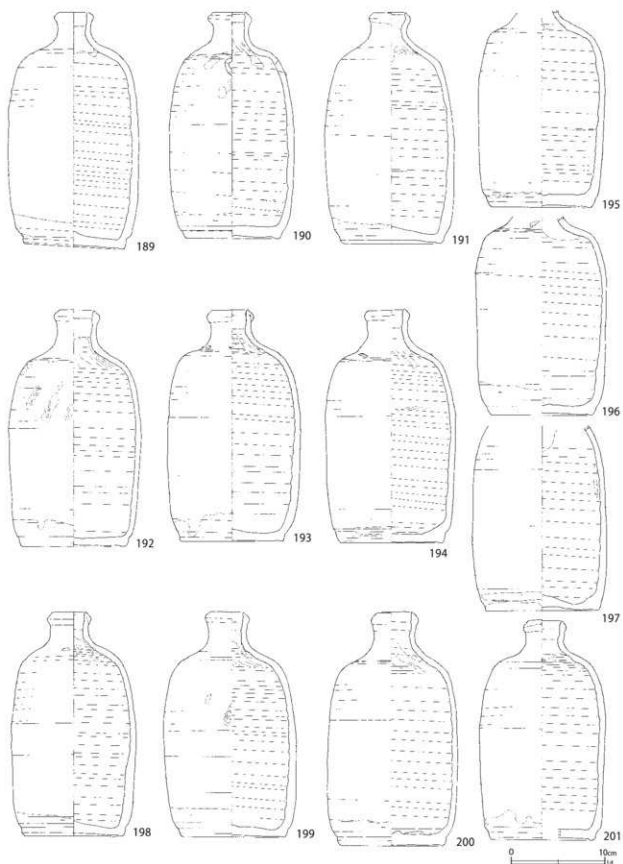
C6-I7・8グリッドから検出された土壌で、重複関係から第442号土壌が新しい。第442号土壌は長軸方向N-77°-Eを示す長方形土壌、第450号土壌は不整形円形の土壌である。第450号土壌の最下層は樹皮を主体とする層である。

第159図218~228は第442号土壌出土の陶磁器

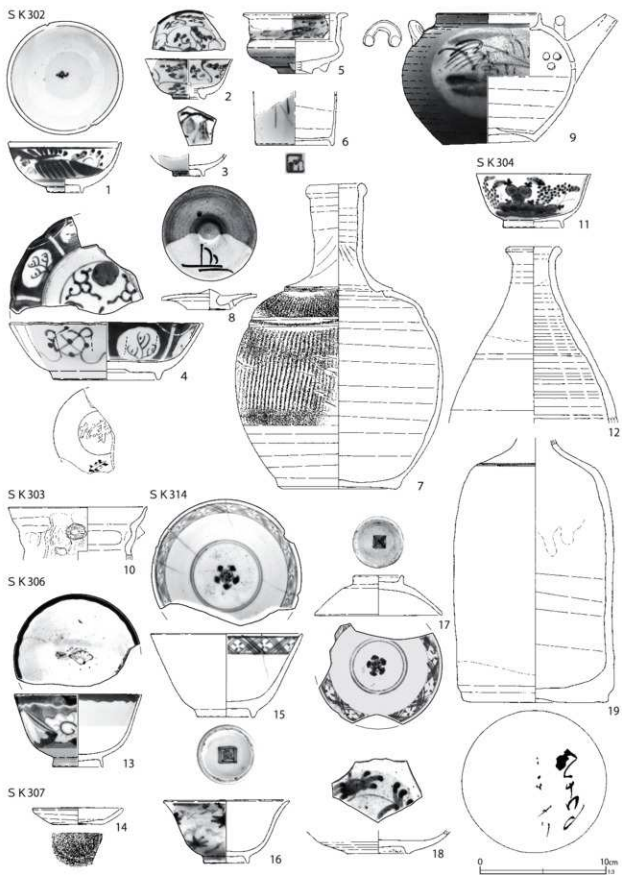
で、218は赤絵上絵付の磁器碗、219も赤絵で内外面に文字が上絵付される。221は酸化コバルト染付の磁器段重、222は内面に上絵付「くりはし」「鯉こく」「稲荷屋」とある磁器薄手環で、同文の例が第438号土壌(第159図209)にみられる。栗橋船戸の稲荷屋に係る遺物である。224は大堀相馬焼の碗、226は備前焼の小型徳利である。第161・162図268~279は第450号土壌の陶磁器で、肥前系磁器皿類(272・273)のほか、瀬戸美濃系磁器には、内底面に金彩で亀が描かれた坏(271)や型押反皿(275)等がある。第442号土壌からの混入も考慮されるが、第450号土壌が19世紀中葉までの埋没、第442号土壌は19世紀中葉以降に帰属すると考えられる。第205図には、各遺構から出土した木製品鉢(37)と小型の曲物(39)を図示した。第212図88・89は第442号土壌の銅製品で、88は蓋、89は耳かきである。第216図は石製品で、21・22が第442号土壌の硯と砥石、23が第450号土壌の砥石で墨痕が認められる。第219図7は第442号土壌、9は第450号土壌出土の硝子製筭で、いずれも中空である。

第601・602・603号土壌(第128図)

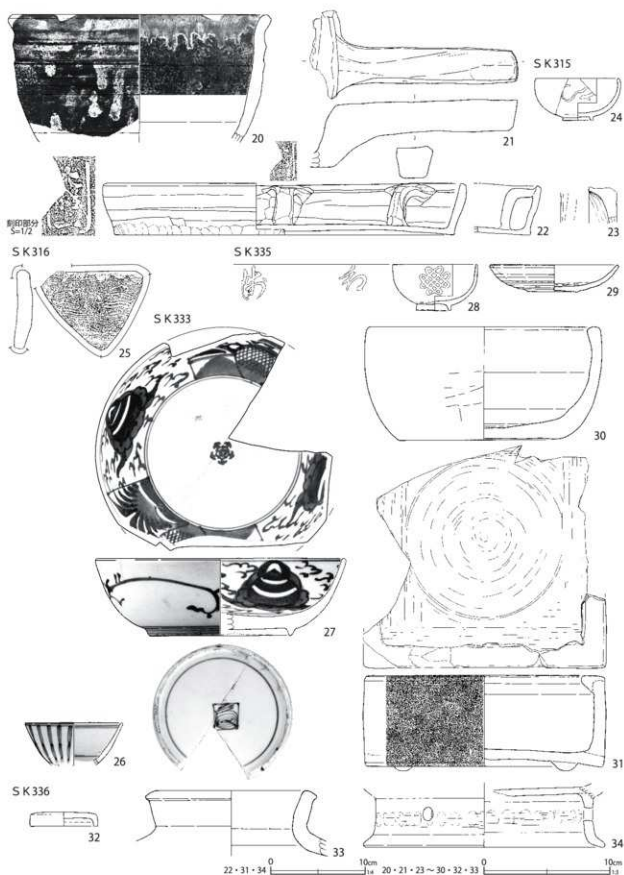
C6-I7、J7グリッドに位置する長方形の



第148図 土壙出土遺物(14)



第149図 土壙出土遺物 (15)



第150図 土壇出土遺物 (16)

S K 336

S K 338

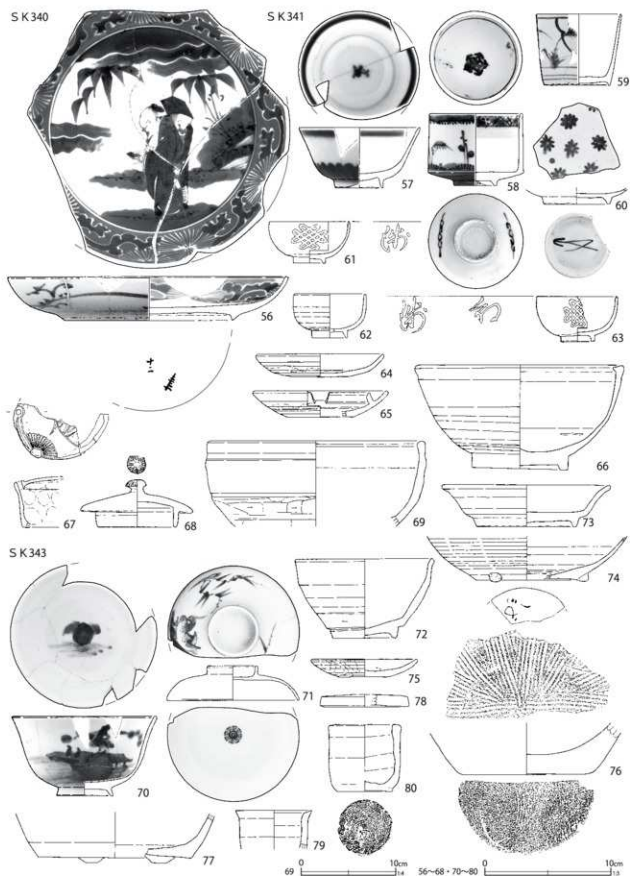
S K 339

S K 340

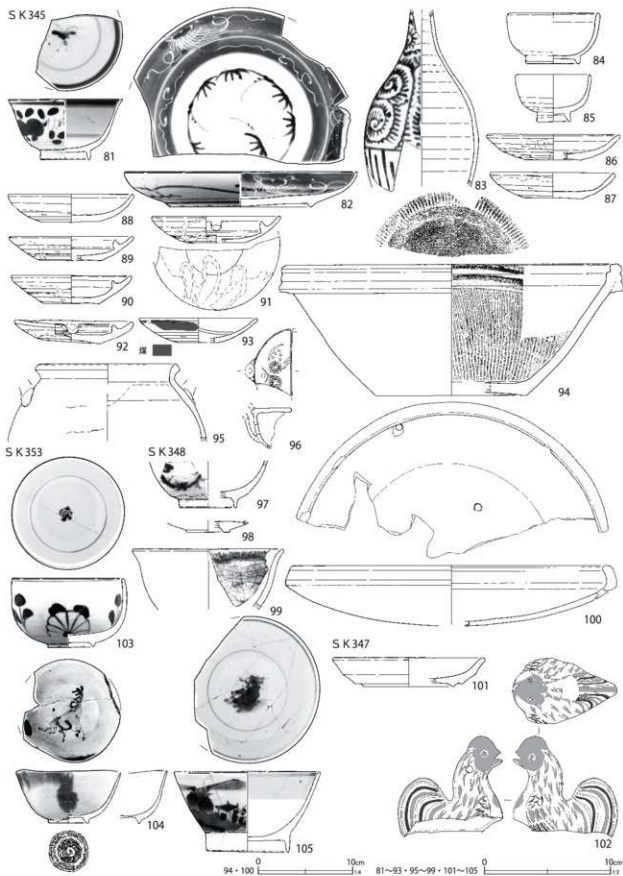


SK340

SK341



第152図 土壇出土遺物 (18)



第153図 土坑出土遺物 (19)